
漆黒と魔法少女リリカルなのは 死神代行と魔法少女

桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

漆黒と魔法少女リリカルなのは 死神代行と魔法少女

【Nコード】

N78520

【作者名】

桜

【あらすじ】

これは赤夜叉さんから許可を貰い『銀魂×魔法少女リリカルなのは 魔法少女と銀色の侍』をベースにしたブリーチのクロスオーバー小説です

赤夜叉さんの小説を元にしてるので内容が似たような感じになるかもしれませんが読んでくれる人がいたら嬉しいです

第一幕 プロローグ（前書き）

この小説は赤夜叉さんから許可を貰い『銀魂×魔法少女リリカルなのは 魔法少女と銀色の侍』をベースにした小説です
赤夜叉さんの小説を元に行っているので内容が似たような感じになる
かもしれませんか読んでくれる人がいたら嬉しいです。

第一幕 プロローグ

ここは町医者クロサキ医院。

この家に住む黒崎一護の慌しい朝は始まる。

「グッドモニーニング、一護オオオオ!!」

そんな事を叫びながら一ヒゲ面の暑苦しいおっさんが一護が飛び蹴りを仕掛けてきた。

「ぐおおおお!!」

そして一瞬で床に頭から叩き付けられたヒゲ面のおっさん。

「朝から息子の寝首を狙ってるんじゃないよ! このクソオヤジ!!」

「さずかは……わが息子だ……もう教える事はなにもない」

そんな風に弱々しく答えるヒゲ面のおっさん……もといこのクロサキ医院の院長である一護の父親、黒崎一心。

ちなみに顔を鷺掴みにされているのに何故一心は普通に喋れるのかは永遠に謎だ。

「たくっ……毎回毎回同じ事を繰り返しやがっていい加減に懲りろよな」

「何を言う一護、父さんはお前に強くなってほしいと思う、親心、何故それをお前は分からのだ」

「うるせー！ー！！」

メリメリ。

「ギャアアアアアアア！！」

「クソオヤジ……いっぺん死んでみるか？」

鷺掴みにされた一心の顔から嫌な音が響く。

「一護一護、顔が潰れちゃう！！父さんの顔がトマトみたいに潰れ

「ちやう!!」

「残念だったなあークソオヤジ……トマトならお前よりも人様より役に立つからな……」

更に驚掴みをしている手に力が入る。

「じゃあ、父さんはトマト以下なのか?……ギャアアアア!!……本当に父さんの顔が割れるうううう!!ご、ごめんなさい、一護! だからもう止め!」

パキユ。

驚掴みされた顔から乾いた音が聞こえた。

そのまま一心はピクリとも動かなくなり少しずつ痙攣をしていた。

「そのまま一生寝てろ」

一護はそう倒れて動かなくなった自分のオヤジに言って廊下を出た

・
・

・ ・ ・

一時間後

「よしやあ！一丁あがり！！」

一護は白い仮面をつけて胸に穴が開いた化け物を倒しながら言った。

黒い着物を着て身丈ほどの刀を手を持っている。

「一護、どうした？今日は随分と張り切っているな」

そう言ってきたのは黒髪の少女は朽木ルキアだ。

彼女は一護と同じ黒い着物を着ている。

「まあな、朝から色々あったからな」

一護に返り討ちされた一心はあの後、すぐに復活して再び奇襲してきたが

また返り討ちにされて家でまだ気絶したままだ。

「そうか、それはそうと一護、浦原が虚退治が終わったら自分の所にきてほしいと言ってたぞ」

「浦原さんが？たくっ、面倒くせえなあ」

「だが、行かないと浦原の奴、何をするのが分からんぞ？」

「へーい、へーい」

・
・
・
・
・

「ようこそ黒崎さん、待っていましたよ」

浦原商店に入ると縦シマの帽子を被って下駄を履いた、冴えないおっさんが出迎えた。

このおっさんの名前は浦原喜助。この浦原商店の店主である。

「浦原さん、俺達に何か用なのか？」

「はいっ、実は黒崎さん達に折り入ってお願いがありました」

「「お願い？」」

思わず二人の声が重なる。

「ええ……あたしが開発した『次元移動装置』の実験に付き合ってほしいんですよ」

ガラッ

浦原さんが奥にある部屋の扉を開けると大きな装置があった。

「すっげええー、これが次元移動装置ってやつが」

一護は声を荒げて言った。

「浦原、この次元移動マシンってやつは一体何なのだ？」

ルキアが浦原にそう聞いてきた。

「次元移動マシンっていうのは穿界門を通らずにソウル・ソサエティや現世に行ける装置なんですか……イマイチ装置がうまく作動しないんですよ。そこであなた達に協力してくれませんか？」

「協力してくれって言われてもな……」

一護が浦原さんの言った事に困惑している。

「なんで穿界門を通らずにソウル・ソサエティや現世に行ける装置を作ったのだ？」

「朽木さん、良いですか、ソウル・ソサエティから穿界門を通じて現世に向かうとなると数秒の誤差がでます。一刻も争う状況でその誤差は致命的に悪くなります。そこでこの装置を使えばその数秒の誤差がなくなり早く虚に対処ができるようになるんです」

そう浦原さんは真剣な表情で説明してくれた。

「分かった、浦原がそういうのなら協力してやる」

「ル、ルキア、何を勝手に…」

「一護、お前は死神代行だ、ならば協力するのが通りだろ」

「はあ…分かったよ、協力すればいいんだな」

「そうですか！黒崎さん達ならきっと協力してくれると思ってました。さあ、この装置に入ってください」

浦原さんがそう言って一護達を装置の中に押し込む。

「さあ、行きますよ、黒崎さんと朽木さん」

ポチッ

浦原さんがスイッチを押すと装置から警音が聞こえ装置がガタガタと震え始める。

「う、浦原、ほ、本当にこれは大丈夫なのか？」

「・・・・・・・・・・」

「おい、浦原さん、本当に大丈夫なのか？答えろよ」

「・・・・・・・・・・」

浦原さんは決して一護達の目を合わせない。

そんな浦原さんの態度に冷や汗が止まらなかった。

「……黒崎さん、朽木さん、失敗しちゃいました」

「失敗だど！？てめえ、ふざけるな、早くここから――」

そう一護が言いかけた時に装置の中が眩しい光に包まれる。

その光が収まり浦原が装置の中には一護達の姿は無かった。

「……まあ、黒崎さん達なら大丈夫でしょう」

浦原さんのそんな呟きに答える者は誰も居ない。

・ ・ ・ ・ ・

「んー」

ゆっくり瞼を開けて上半身を起こした。

「あれ？」

一護は自分の回りを見渡した。今、自分が居る所はどこかのビルの屋上としか分からない。

「ここはどこなんだー!!！」

そんな一護の疑問も答えるものは誰も居ない。

第一幕 プロローグ（後書き）

桜「初めまして作者の桜です」

一護「主人公の黒崎一護だ」

桜「いががでしたか？グダグダになちゃいましてけど、頑張って書きます、よろしくお願いします。後、誤字脱字感想質問をどんどん送ってくれると嬉しいですよ」

一護「リリかるなのはのキャラは第二幕に登場するみたいだから次も読んでくれるよ」

桜「それじゃあ、また第二幕にまた会いましょう」

一護「じゃあな」

第二幕 不思議な出会い（前書き）

一護「漆黒と魔法少女リリカルなのは 死神代行と魔法少女が始まるぜ」

桜「チャンネルはそのままで」

一護「いや、チャンネルなんてないから」

第二幕 不思議な出会い

「アルフ。あの人誰なんだろうね？」

突然、現れた一護を空から見下ろしながら金髪の少女が隣にいる『アルフ』と呼ばれた人物に話しかける。

「さあ？管理局の魔導師……なのかな？」

アルフは首を傾げる。

「……何かおかしな格好をしているね。管理局の魔導師には見えな
い」

二人は一護の格好を見た。見た目からして魔導師に見えない。バリ
アジャケットは着ていないし、杖も持っていない。代わりに黒い着
物を着て身丈ほどの刀を背負っている。

「フェイトどうする？」

『フェイト』と呼ばれた金髪の少女は杖を強く握る。

「捕まえよう。あの人には悪いけど」

「分かった。次元移転による魔力は全く感じなかったから強敵かもしれない。気をつけてねフェイト」

「うんアルフも気をつけて」

アルフにそう返して、手に持つ『バルティッシュ』を起動させる。

「私が初撃で相手の気を逸らすから、アルフは捕縛用のバインドで捕まえて」

「了解！」

・
・
・
・
・

一護はその場を行ったり来たりしている。

「たくっ…ここは一体どこなんだよ。さっきまで朝だったのにもう夜になってるし、いつの間にかルキアもいねえし」

一護は頭を掻きながら呟く。

「クソオオオ！浦原さんの変な実験が失敗したせいであんなったんだ！あの野郎！帰ったらぶっ飛ばしてやるからなああああ！」

実験を失敗した浦原さんへの怒りで拳が震える。

・
・
・
・
・

フェイトとアルフは空中から一護に迫る。

（ごめんなさい）

心の中で謝りながら、一護に向かって数発の黄色に魔力弾を放った。

「！！」

一護は自分に向かってくる数発の魔力弾に気付く。一護は素早く背中にある『斬月』を取り、自分に迫る魔力弾を全て弾く。

魔力弾を放ったフェイトは驚いた。

（！魔導師じゃない一般市民が私の攻撃を弾いた！？）

「たあああああ！！」

アルフは一護の後ろから殴りかかる。だが一護はそれに気付いて『瞬歩』でかわす。

（き、消えた！？）

「アルフ。後ろ！」

フェイトの叫びに気付き、後ろを向くが反応が一瞬遅れてる為に避ける事ができない。

一護はそのままアルフに向かって斬月を振り下ろす。

（だ、駄目。斬られる）

アルフは思わず目を瞑る。

しかし何時まで待っても斬られた痛みがこない。

アルフはそっと目を開けると、一護の刀が目の前で止められていた。

「勝負…ありだな」

そう言ってアルフの顔から斬月を引き背中に背負う。

「「!？」」

一護の行動にアルフとフェイトは驚いて動きを止める。

「いきなり襲ってきやがって…怪我をしたらどうするつもりだったんだ」

襲ったアルフとフェイトに説教をする様に言った。

すると、フェイトがアルフの隣に着地する。

「大丈夫アルフ？」

「う…うん。大丈夫だよフェイト」

「貴方は管理局の魔導師ですか？」

バルティッシュを構えて警戒しながら一護に問う。

「はあ？管理局？なんだそれは？俺はそんなわけわかんねえ所の間じゃねえぞ」

「えっ？」

一護の問いに思わず警戒を緩める。

「ていうか、アンタたちは一体何者なんだ？見たところ死覇装は着てねえし、仮面も斬魄刀も持っていないから死神、破面には見えねえ、霊圧も全く感じない。何かのコスプレなのかその格好は？」

フェイト達の格好を見て一護はそう言った。フェイトは黒いマントを羽織っていてアルフは耳と尻尾が生えている。何かのコスプレを見ている気分だ。

「そっちの方のアンタは犬のコスプレか？」

「犬じゃない！あたしは狼だ！」

「うるせえな…どっちも似た様なもんだろ」

「全然違う！」

「アルフ、落ち着いて」

フェイトはアルフを落ち着かせようとする。

「あ…あの」

「んっ？」

「本当に管理局の人間じゃないんですか？」

「さっきからそう言ってるだろ、いきなりこんな場所に飛ばされてイライラしている時に襲ってきやがってよ」

「ご、ごめんなさい…あ…あの…よかったら何があったのか教えてくれませんか？」

・
・
・
・
・

「じゃあ貴方は知り合いの実験が失敗して気がついたら此処にいたんですね」

「ああ」

一護は今までの出来事を全て説明した。

「フェイト。コイツ『次元漂流者』かもしれないね」

「『次元漂流者』？」

一護は首を傾げる。

「簡単にいえば迷子です。未開の世界から何かしらの拍子で別の世界に飛ばされた人間のことです」

とフェイトは答える

「じゃ、ここは別の世界ってことか…イマイチ信じられねえ」

一護はそう呟く

『一護…』

誰か自分の事を呼び声が聞こえて後ろを向くとサングラスを掛けたおっさんがいる。

「斬月のおっさん！」

一護に斬月のおっさんと呼ばれた人物は話を続ける。

『この子達が言っている事は本当だ、ここは一護が住んでいた世界とソウル・ソ・サイティとも違う全く次元が異なる世界だ』

「斬月のおっさんがそう言うって事は本当なんだろうな。ハア、面倒くさい事になったなあ」

一護は頭を掻きながらため息つく

ちなみにフェイトとアルフは頭に？マークが浮いている。

『それから一護：ここでは死神や虚が存在しない世界。死神化しているお前が肉体を持ったのが証拠だ』

「そういえばこいつらはいきなり攻撃してきたって事は俺の姿が見えてるってことだよな。まさか死神の姿で肉体を持ってるなんて思わなかったぜ」

『それから最後に一言だけ言っていくぞ、一護。ここは死神や虚、霊圧が存在しないかわりにそれとよく似た物が存在している。ここでの戦闘は随分に用心しているんだな』

「ありがとうな。斬月のおっさん。気をつけるよ」

『さらばだ、一護、私はそろそろ戻らせてもらおうぞ』

斬月のおっさんはそう言うのと、黒い霧になり一護の刀に戻っていく。

「あの…貴方はこの後どうするんですか？」

今まで話に加わることがなかったフェイトが聞いてきた。

「んっ？そうだな…ルキアを探さなきゃいけねえし、この世界の金
は持ってねえからホテルに泊まることもできねえ。野宿しかねえか」

腕を組みながらそんな事を言う一護

「もし…よかったら私達の家泊まりませんか？」

とフェイトが一護にそう提案してきた。

「えっ？いいのかよ」

「はい。いいよねアルフ？」

フェイトは隣にいるアルフを見た。

「まあフェイトがいいならいいけどね。それにコイツは悪い奴に見えるし」

アルフもフェイトに同意する。

「そんな簡単に素性を知らない奴を止めていいのか？」

「はい。アルフも言ってたけど、貴方は悪い人には見えませんか」

フェイトは完全に警戒を解いてバルティッシュをしまった。

「そうか、それならお言葉に甘えさせてもらうか、あつ、そういやあ自己紹介はまだしてなかったな」

一護はフェイト達に向き直る。

「俺は黒崎一護、死神代行だ」

「私はフェイト、フェイト・テストロッサ」

「あたしはアルフだよ」

フェイト達も自己紹介をする。

（フェイトにアルフ？どこかで聞いた事がある名前だな）

「まあ、ともかく。これからよろしくな、フェイト、アルフ」

手を差し出して一護はフェイトに握手を求める。

「は…はい…こちらこそよろしくお願いします。」

何故かフェイトは頬を赤く染めながら握手した。

「こちらこそよろしくねえ」

アルフも笑顔で握手にこたえる

第二幕 不思議な出会い（後書き）

コン「リリカル図鑑ゴールデン！」

桜「今回から始まるリリカル図鑑ゴールデンは読者の質問に答えるコーナーだよ」

一護「おい！なんだよりリカル図鑑って、完全に本家『死神図鑑ゴールデン』のパクリじゃねえかよ。しかも本編に登場していないコンが登場してるし」

桜「コンさんがタイトルコールをやってもらったのは本家の死神図鑑ゴールデンもタイトルコールをやっていたので呼びました♪」

一護「それだけの理由でコン呼んたのかよ…」

桜「はい♪」

一護「鬼だな……お前…」

桜「この第一回リリカル図鑑ゴールデンのお客様は武士道さんの質問です。『霊圧の設定をそのまま利用したらリリカルキャラはフル

ポッコになりますので、工夫したらどうでしょうか?』についてです。その事はちゃんと考えているので大丈夫です」

一護「本当か？」

桜「はい、ブリーチの霊圧の設定はそのまま使うつもりです。リリカルなのは世界での霊圧は魔力とよく似た物なのでなのは達は一護の霊圧で潰れる事はありません。ちなみに魔導師によってはブリーチの隊長格並の実力を持っている人がいるので一護は苦戦させられる予定です」

一護「俺はそんな敵とはあんまり戦いたくねえな」

桜「REIさんと武士党さん感想ありがとうございました。他の皆さんも質問感想誤字脱字があったらどんどん送ってください。待ってまーす。」

一護「今回は『ここはアニメの世界!?!』だ。次も読んでくれよ」

桜「では、第三幕で会いましょう。さようなら」

一護「じゃあな」

第三幕 魔導師？（前書き）

桜「すいません。都合によりタイトルを変更させてもらいました。本当にすいませんでしたm（――）m」

一護「おいおい、マジかよ。楽しみにしてくれた読者に何て説明する気だよ？」

桜「とにかく謝り通します！」

一護「謝れば済むと思ってるのか」

桜「それでは漆黒と魔法少女リリカルなのは 死神代行と魔法少女の第三幕。『魔導師？』が始まるよ」

一護「おい、無視してるんじゃないぞ」

第三幕 魔導師？

「すげえー！！」

一護はフェイト達が住んでいるマンションを見上げながら驚きの声を上げる。

この辺り一番高いマンションである。

「ここはどう見ても高級マンションじゃねえか、子供のくせによくこんな所に住めたな」

アルフとフェイトが中に入って一護もそれに続いて入り、エレベーターに乗って上がる。

「あれ？アルフ。お前は尻尾と耳は隠せるのか？」

一護はいつのまにか無くなっている耳と尻尾の事に聞く。

「まあね♪あたしは魔導師の使い魔だよ。それくらいおやすい御用さ♪」

そんな事をアルフと喋っているうちにエレベーターが目的の階にいた。

エレベーターを出て少し歩きフェイト達が住んでいる部屋の前に到着し、鍵を開けて部屋の中に入る。

さずかに高級マンションであるだけに中は結構広い。ガラス張りの壁から綺麗な夜景が見える。

「結構いい眺めじゃねえか」

一護は夜景を見ながら言った。フェイトとアルフはソファーに座る。

「こんな広い部屋で二人だけで住んでるのか？家族はいねえのか？」

一護もソファーに座りながらフェイト達にそんな事を聞く

「・・・・・・・・・・」

一護の問いにアルフとフェイトは悲しそうに目して顔を俯く。

「わ、悪い……聞いちゃまずかったか」

フェイト達の雰囲気思わず謝る。

「いや、大丈夫です。気にしないで下さい。それに一つ質問があるんですけど」

「んっ？別にいいけどよ」

「さっき：貴方は自分は死神代行って言ってましたけど、それは一体なんですか？」

「あ、それはあたしも気になってたところだよ、死神といったら大鎌を持って骸骨の姿をしているものだと思ってたもん」

フェイトの質問にアルフが加わる。

「んー、説明してもいいけどよお、とても信じられる話じゃねえぞ」

一護は全てを説明した。

死神の力のこと。

ソウル・ソ・サイティのこと。

虚（悪霊）のこと。

自分はその虚を昇華させて魂葬させる仕事をしていること。

そして…自分に家族を守る力をくれたルキアの事を全て説明した。

「へえー、あんたの世界は結構面白い事になっているんだね♪」

アルフが面白そうに笑う。

「アルフ！笑いことじゃないでしょ」

「別に気にしてねえから大丈夫だ。それに犬の耳と尻尾を持ってる奴の方が笑えるけどな」

「だからあたしは狼だってば！」

「はいはい」

適当に聞き流しながら一護はそう答える

「じゃあ今度はこっちの質問だ、フェイトは何者なんだ？見たことがねえ技は使ってたし」

と、一護はフェイトに質問した。

「私は『魔導師』です」

「魔導師？」

聞き慣れない単語に今度は一護が首を傾げる。

「魔力を用いて魔法を使う人間のことを魔導師といいます」

「魔法ねえ…世界にはいろんな奴がいるもんだな」

一護は視線をフェイトからアルフに移す

「そういえばアルフはさっき自分の事を使い魔って言ってたけど、それは一体なんだ？」

「使い魔は魔導師が使役する一種の人造生物さ」

「ふーん、ひょっとしてフェイトは凄腕の魔導師なのか」

「そ、そんな事ないよ」

一護の言葉に再び顔を赤くするフェイト。

フェイトの隣にいるアルフはニコニコしながら尻尾ふっている。フェイトが褒められて嬉しいみたいだ。

「あの…もう一つ質問していいですか？」

「構わないぜ」

「貴方が死神代行っていうのは分かりました。でも私の攻撃を弾いたその刀はなんですか？普通の刀にしたら大きすぎますし、鐔も柄もついてませんよね」

「コイツは斬月、俺の相棒で斬魄刀だ」

「「斬魄刀？」」

「ああ、そうだ」

一護は背中に背負っている斬月を取ってフェイト達に見せてた。

「死神の斬魄刀は普通の刀と違って虚を斬って昇華する事ができるし、更に斬魄刀の名前を呼ぶ事で真の能力を解放する事ができるんだ。俺の斬魄刀の名前は斬月で常時解放型なんだよ」

一護は死神の斬魄刀について説明をした。

「じゃあ、さっきのクラザンを掛けた男も斬魄刀の一部なのか？」

アルフが一護にそんな事を聞いてきた。

「ああ、あのおっさんは斬月の本体なんだ。俺の斬魄刀だけじゃない他の斬魄刀にも本体はいるぜ」

斬月を背負い直しながら一護はそう言う。

「斬魄刀って奴は興味深い物だねえ」

そう言いながらアルフが斬月の臭いを嗅いでいる時に。

グウー。

誰かの腹の虫が聞こえた。

一護とフェイトが腹の虫のした方向を見ると鳴らした本人が顔を赤くして言った。

「……ねえ、フェイト。そろそろ夕食にしない？」

とアルフが言った。

「うん、そうだな」

・
・
・
・
・

アルフとフェイトが夕食をテーブルの上に置く

「それじゃあ食べようかフェイト」

「うん。いただきます」

とフェイトが食べようとした時

「ちょっと待て」

「え？」

一護がフェイトを止めた。

「アルフ、フェイト。これは……なんだ？」

一護がテーブルの上にあるものを指差す。

アルフとフェイトが顔を見合わせ。

「夕食だけど…」

と言った。

しかしテーブルの上に置かれているのはインスタント食品や冷凍食品ばかりだった。

「なめてるのかあああ!!」

テーブルをひっくり返さんとばかりの勢いで立ち上がる一護

「「えっ?」」

一護の勢いに圧されてフェイトとアルフは身体を大きく震わす。

「育ち盛りがこんな物ばかり食べていいと思ってるのか! もっと栄

養のある物を食べやがれ!!」

「あの……えっと……ごめんなさい……」

一護の迫力に圧されて思わず謝るフェイト。

「それからお前!」

アルフを指差す一護。

「何を食おうとしてるんだテメエは!」

「何って…」

アルフは手に持っている箱を一護に見せる。

「ドックフードだけど」

「やっぱり犬じゃねえか!!」

「違う！狼だ！」

「ドックフードを食べようとしてる奴が言っても説得力はねーんだよ！てか、普通、狼っていうのは生肉を食うものだろ！ドックフードは食べるか！！！」

息を切らしながら叫び一護。

「あー一護、大丈夫か？」

恐る恐るアルフが話しかける。

「たくっ。しょうがねえな。俺が作るか」

そう言っで一護は台所に向かい冷蔵庫を開けた。

「！！！」

一護は冷蔵庫の中を見て絶句した。

「今度はどうしだんたい一護？」

アルフが歩いてきた。

「冷蔵庫が空じゃねーかあああああ」

一護は再び叫ぶ

・
・
・
・
・

結局、一護達はインスタント料理を食べて夕食を済ませた。

「明日は俺が食材を買って、作るしかねーな」

頭を掻きながらそんな事を言う一護。

「何か悪いねえ一護」

「気にするな、俺は家に泊めてもらうんだからそれくらいは当たり前だろ」

「ありがとう。一護」

フェイトが一護に礼を言う。

「礼なんていらねーよ」

「素直じゃないねえー」

ニヤニヤと笑うアルフ。

「ぶっ飛ばすぞテメェ…」

アルフを睨み付ける一護。

「そういえば一護。あの…仲間を探さなくていいの？」

フェイトはそう一護に尋ねる。

「んっ？まあ、アイツなら大丈夫だろ」

「でも探すんだろ」

とアルフは言った。

「まあな、一応大切な仲間だからな」

一護はそつと呟く。

「ホント素直じゃないな」

「うるせー…」

一護のそんな言葉を聞いてアルフとフェイトは微笑む。

第三幕 魔導師？（後書き）

桜「祝！ユニークアクセス数500人突破！PV数1000人突破！」

一護「すげえな、もうそこまで行ったのかよ」

桜「はい。まさかこんなに読んでくれる人が居ると思いませんでした。皆さんこんなグダグダな文章を読んでくれてありがとうございます」

一護「ところでリリカル図鑑ゴールドデンはやらないのか？」

桜「はい。今回は質問も感想も来てないのでやることが無いんです……（泣）」

一護「そんな事くらいで泣くんじゃねーよ。みんな、まだ感想質問は受け付けているからドンドン送ってくれよな」

桜「それではまだ次の話で会いましょう」

第四幕 ここはアニメの世界！？（前書き）

一護「漆黑と魔法少女 死神代行と魔法少女が始まるぜ！」

桜「今回は一護さんやルキアさん以外にも次元漂流者が現れるですよ」

一護「それは本当かよ、一体誰なんだそれは？」

桜「それは…」

一護「それは？」

桜「それは…物語を読んで自分で確かめて下さい」

一護「ちくしょうー！やっぱりこんなオチかよ」

第四幕 ここはアニメの世界!?

浦原さんの実験の失敗により一護達は別の世界に飛ばされてしまった。そこで一護は魔導詩のフェイトと使い魔のアルフに出会った。そのころ一護と一緒にこの世界に飛ばされたルキアと言うと…

時は一護とフェイトが会う一週間前まで遡る。

ここは海鳴市の住宅街にある高町家。

私、高町なのはは極々平凡な小学三年生のはずだったんだけど、何の因果か運命か魔法少女なんてやってます。

私は違う世界から来たユーノ君のお手伝いで『ジュエルシード』っていう物を集めてます。

「いただきます」

今は家族のみんなと夕食を食べています。

お父さんの高町土郎、お母さんの高町桃子、お兄さんの高町恭也、お姉ちゃんの高町美由希、そして私、高町なのはの五人家族です。

実は今日、我が家に新しい家族というか……友達というか……居候ができました。

「すみませーん、ご飯をおわかりしていいですか？」

茶碗を持ちながら桃子に尋ねたのは赤髪を後ろに纏め、額に刺青をしている男性、阿散井恋次。

「食いずきだぞ、恋次」

恋次を注意するのは隣に座っている黒髪が綺麗で美少女の朽木ルキア。

「もう3杯目だぞ、お前は遠慮って言葉は知らんのが？」

「うるせ、俺の辞書には遠慮なんて言葉はねえよ」

「威張るな、このたわけが、すまぬ桃子殿」

恋次を殴りながらルキアは桃子に謝罪する。

「うふふ。いいのよ。遠慮しないで、どんどん食べてね」

桃子は優しく微笑んで恋次から茶碗を受け取り、ご飯を盛って恋次に渡した。

「ほら、ルキア、ご婦人はこう言ってるんだ。ここで断ったら男が廃るぜ」

と言いながら恋次はご飯を食べる。

「ルキアちゃんも遠慮しないでもいいんだよ」

士郎がルキアに言った。

「すまぬ」

ルキアは士郎に頭を下げた。

そんなやり取り見ながら私は楽しく食事を続けました。

どうして恋次さんとルキアさんが家にいるかと言いますと、ジュエルシート集めから家に帰る途中に家の前で倒れている二人を見つけたんです。二人は黒い着物を着て刀を挿して見た事がない格好をしたいたから、もしかしてユーノ君が言ってた次元漂流者かも知れないと思って倒れている二人を起こしたら話を聞いてみたら案の定、次元漂流者でした。でもルキアさんと恋次さんは私が自分達の姿が見えていた事に驚いていたのは何故でしょうか？ともかくこの二人をこのままにしておくにはいかなかったので

お父さんとお母さんに二人の事を話してしばらく二人の事を泊めてもらう事になったんです。もちろん家族にはこの二人が次元漂流者

という事は秘密にしています。

そういえばルキアさんはどうして私の名前を教えてないのに何で分かったんでしょうか？

何でか分からないけど、物凄い驚いた顔をしていたし？

・
・
・
・
・
ルキア S I D E

私と恋次は高町家の人達にお世話になっている。目を覚まして本当に驚いたぞ。何故なら目の前にいた少女は一護の妹達が大ファンの『魔法少女リリカルなのは』の主人公、高町なのはだったのだから。もし此処が本当に『リリカルなのは』の世界ならば私達は浦原の実験によりアニメの世界に来た事になる。おそらく一護もこの世界にいるだろう、ちなみに私がどうしてリリカルなのはの事を知っているのか、それは私が一護の妹達と一緒にリリカルなのはのDVDを見たからだ。そのおかげでこの世界がすぐに何処なのか理解できたのが幸いだかな。

そんな事を考えている内に夕食を終わって、私と恋次は今後の事を話し合うためになのはの部屋に呼ばれた。

・

・ ・ ・ ・
「ルキアさんと恋次さんには申し訳がありませんが、僕の力では二人を元の世界に戻す事はできません」

フェレット姿のユーノは申し訳なさそうに二人に言った。

「それはお前が気にする必要はないぜ」

恋次がユーノを励ます。

「そうだぞ、元はといえば浦原が実験に失敗したせいなんだからな。お前が自分を責める必要はない」

ルキアもユーノを励ます。

「ありがとうございます。ルキアさん、恋次さん」

ユーノは励ましてくれた、恋次達にお礼を言う。

「しかし、一護もこの世界に飛ばされているなら一体どこにいやがるんだ？」

恋次は天井を見ながらそう呟く。

「すみません、一護って誰ですか？」

なのはが首を傾げる。

「ああ、すまぬな、一護っていうのはな、私達の仲間で死神なんだ」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

「「えええー！！し、死神ー！！」」

死神という言葉聞いた途端になのはとユーノは尻餅をついた。

「なんだ？死神の事は初めて会った時に話だはずだろ？」

と恋次はなのは達に言った。

「初耳です、そんな事を聞いたのは！」

なのはは怯える様に恋次とルキアに言った。

「わ、私の命を狩りに来たんですか？」

「はぁ？何を言ってるんだ？お前？」

「なのは殿、私達、死神は貴方が思っているような物じゃありません」

・ ・ ・ ・ ・

「ふーん、そうなんですか、死神は虚という化け物を倒して昇華させるのが仕事なんですね」

「まあ、だいたいそうな感じだな」

恋次はそう答える。

「ところで何故、恋次がこの世界にいるのだ？浦原のマシンには入っていないかったはずだろ」

今更ながらルキアは恋次がどうして此処にいるのか聞いてきた。

「ああ、俺もよくは覚えていねえだか、ある任務で穿界門を通っていた時に突然、光に包まれて気がついたらこの世界に居たって事だ」

「浦原の奴め、他の奴らまで迷惑をかけるなんてけしからん奴だ」

怒りに燃える今のルキアは十刃でも倒せると思った恋次であった。

「まあ、ともかく、これも何かの運だ、俺達もそのジュエルシートで奴を集めるのに協力してやるよ」

「駄目です！ジュエルシートはかなり危険な物なんです。貴方達に協力してもらうわけには…」

「おいおい、俺達を誰だと思ってるんだ。普通の奴らより役に立つぜ」

「でも…」

「大丈夫ですよ。ユーノ殿。我々はこう見えてもかなり腕に自信があるからな。きっとジュエルシート探しに役に立つはずです」

自分達もジュエルシート探しを協力するって言い出した恋次達。

「本当にいいんですか？」

「はん、何を当たり前の事を言ってんだ。俺達はもう仲間だろ」

と恋次は力強くなのはに言った。

「ありがとう、ルキアさん、恋次さん」

なのはは二人に笑顔でお礼を言った。

第四幕 ここはアニメの世界！？（後書き）

コン「リリカル図鑑ゴールデン！」

桜「さあて、一話ぶりのリリカル図鑑ゴールデンが始まりました」

一護「テンションたけえーな、おい」

桜「当然です！こんなグダグダな小説を読んできたうえに感想や質問を送ってくれて読者にお礼ができるんです」

一護「そ、そういうものなのか」

桜「さあて、最初は感想をくれた赤夜叉さん、剣の英雄さん、ありがとうございました。次は質問のコーナーです。最初は剣の英雄さんの質問です。『一護達の実力は原作ではどれくらいの実力なんですか』これはなのはの原作の中の実力って事でいいんですか？それならば一護達は大魔導師以上の実力を持っています。だから一般の魔導師では一護達には歯が立ちません。」

一護「次は赤夜叉さんの質問だ『一護達はリリカルなのは勢に敗ける姿は全然思いつかびません』この答えは簡単だ。作者の桜いわく、リリカルなのは達よりも俺達の方が強いから負ける事はないみたい

だ。まあ、それでも俺達は一応苦戦はするみたいだからパワーバランスはおかしくならないみだいだせ」

桜「今日はここからです。また何かあれば感想質問を送ってください、待ってます」

一護「じゃあな」

第五幕 ジュエルシード搜索 前編（前書き）

桜「三日ぶりの更新！」

一護「遅かったかな一体何をやっていたんだ？」

桜「ちょっと色々忙しかったんですよ。仕事とかで」

一護「そりゃ、大変だったな…まあ、頑張れよ」

桜「それじゃ、気を取り直して『漆黒と魔法少女リリカルなのは 死神代行と魔法少女』第五幕が始まるよー」

第五幕 ジュエルシード搜索 前編

翌朝。

遠見市にある高級マンション。フェイト達が泊まってるマンションだ。

「フェイト。やっぱり一護は連れていかないのかい？」

フェイトとアルフは起きて朝食を作っている。食材はまだ買っていないので朝食もインスタント料理だ。

「うん。無関係の一護を巻き込むわけにはいかないから」

そう言ってフェイトは視線をソファアに向けた。

ソファアにはイビキをかきながら寝てる一護の姿があった。

「そうだけど……一護ってけっこう強そうだよ？人手は一人でも多い方が……」

「ダメだよアルフ」

「う…」

フェイトに言われてアルフは諦めて席に着く。

フェイトはソファアで寝ている一護に近寄る。

「一護。朝だよ」

フェイトが一護に声をかける。

「ぐおーがあー」

反応なし

「一護」

今度は肩を振らして起こそうとする。

「ぐおーごあー……う……うーん」

今度は急にうなされ始めた。何か悪い夢でも見てるのかな？

顔が真っ青になってるし、額に汗をかいてるし、本当に大丈夫かな？

「う……ハッ、マ、マタタビッ!!」

何かわけがわからない寝言を叫びながら飛び起きる。

訂正……一護……貴方は一体どんな夢を見てるの？
フェイトとアルフは一護の意味不明の寝言に困惑していた。

「何だ夢か……ていうか、一体どんな夢を見ていたんだ俺は？」

「あたしに聞くなよ」

一護に問いに呆れ顔で答える。

「ふぁ……まあ、いいか、ところでお前らは何処かに出掛けるつもりなのか？」

・ ・ ・ ・ ・

「探し物を探しに行く？」

朝食を食べてる最中にフェイトが話を切り出してきた。

「うん」

「何を探しにいくんだ？」

「それは……」

「なんだ、俺には言えない物なのか」

「うん。ごめんなさい」

一護は少し考える。そして冗談で

「まさか、願いが叶う的な不思議な玉だったりしてな」

「ブーーーーッ！」

一護がなんて事を言うのとフェイトとアルフは飲んでいた牛乳を盛大に吹いた。

「うわ、汚たねえ、いきなり何をしゃがる！」

フェイト達が噴出した牛乳が死覇装に飛び散る。

一護はそんなフェイト達に注意した。

「な……なんでわかったんだい？」

「いや、冗談のつもりで言ったんだか……まさか当たりだとは思わなかったけどな」

一護は自分の死覇装についた牛乳を拭きながらそんな事を言う。

「一護……『ジュエルシールド』を知ってるの？」

「樹液ミート？何だそれは？」

「あの……ジュエルシールドなんですけど……」

「わーったよ。そのジュエルシールドって奴が願いを叶える道具みてーなもんなのか？」

一護のそんな問いに対してフェイトは頷いて答えた。

「なんだよ。お前らはそんなスゲー物を俺に黙って探しに行くのかよ」

「……はい」

「一護。ジュエルシールドは危険な物なんだ！フェイトはあんたを巻き込みたくなかったから……」

アルフは必死でフェイトは庇うように言う。

「危険な物ならば、どうしてフェイト達はそれを探す。お前らはまだ子供だぞ、危険を犯してまでジュエルシールドを探す理由を教えてください」

一護は真っ直ぐな眼でフェイトを見ている。フェイトから理由を聞く為に。

「それは……私の母さんが…ジュエルシードを欲しがっているから」

フェイトは拳を強く握る。

「母さんのためにも絶対にジュエルシードを集めなくちゃ…」

固い決意の表情を浮かべてフェイトは一護に言う。

(母さんか……)

「だから…一護が止めろって言っても絶対に「分かったよ」って、えっ？」

フェイトは一護のそんな言葉に驚きの様子を浮かべた。

「えっ、じゃねえよ。俺も一緒にジュエルシード集めを協力してやるって言ってんだよ」

「で……でも一護！ジュエルシードは…」

「危険な物だって言いたいんだろ？だったら尚更、お前らだけで集めさせるわけにはいかねえ」

一護は真剣な表情でフェイト達に言った。

「だけど……」

「俺の心配はいらねーよ」

「で……でも…」

なおもフェイトは戸惑う。

「もういいじゃないかいフェイト」

アルフがため息をついた。

「アルフ」

「本人が手伝うって言ってるんだから。それに一護は強いからきつと心強いよ」

「・・・・・・・・・・」

アルフに言われてフェイトは黙ってしまふ。

一護はフェイトの言葉を静かに待っている。

「……一護」

一護を見つめてフェイトが口を開いた。

「んっ？」

一護もフェイトを見つめる。

「二人で無茶しないって約束して」

真剣な表情でフェイトは言った。

そんなフェイトの言葉を聞いた一護は優しく微笑み、フェイトの頭を撫でた。

「一、一護、い、いきなり何をするの！／／／／／」

一護に頭を撫でられたフェイトは顔を真っ赤にしながら言った。

「それは俺のセリフだな」

「えっ？」

「お前みたいな奴は全て自分一人で背負い込み無茶しそうだからな」

意地悪な笑みを浮かべて一護は言った。

「こっちも無茶しないと約束する。そしてフェイトも無茶しないと約束してくれ」

「う…うん。約束する……これからもよろしく一護」

「ああ」

・ ・ ・ ・ ・

朝食を食べ終え、支度を済ませた一護達はマンションを出た。

今日はフェイトがジュエルードの封印、アルフと一護はジュエルシード搜索。と言っても一護は魔法が使えないから目で探すしかない。それに一護はご飯の材料も買わなきゃいけないし。

「じゃあ、また後でね一護」

「じゃあねー」

「ああ。気をつけろよ」

マンションの前で一護とフェイト達は別れた。

・ ・ ・ ・ ・

海鳴市。

恋次達はなのは達と一緒に、なのはの友達の木村すずかの家に遊び来ていた。

「スゲエエエ！これって朽木隊長の屋敷と劣らないくらい大きな屋敷だな」

屋敷を見るなり大きな声を上げる恋次。

「恋次。あんまり騒ぐな」

庭で騒ぐ恋次をルキアが注意する。
ちなみに恋次達はいつもの死覇装は着ていない。恋次はワイシャツに黒いズボンを着ていて。ルキアは白いワンピースを着ている。斬魄刀は袋に入れて背中に背負ってる。

「あの二人がなのはの家に居候している人達？」

金髪の少女、アリサ・バニングスがなのはに聞いた。

「うん。そうだよアリサちゃん」

「ねえ、なのはちゃん」

紫色の髪的少女、月村すずかがルキア達をみつめながら、なのはに質問してきた。

「あの二人、不思議な感じかしらない？」

「え!…」

すずかの鋭い質問に思わず声が裏返る。

（意外と鋭いねあの子）

なのはの肩に乗っているユーノも苦笑いをしていた。

「恋次さーん。ルキアさーん」

なのはが二人を呼ぶ。

「行くぞ、恋次。なのは殿が呼んでいるぞ」

「はいはい」

恋次達はなのは達の方へ向かった。

「紹介します。私の友達のアリサちゃんと、すずかちゃんです」

「アリサ・バニングスよ」

「月村すずかです」

恋次達に自己紹介した。

「初めまして。朽木ルキアだ」

「阿散井恋次だ、宜しくな」

第五幕 ジュエルシード搜索 前編（後書き）

桜「今回は前編と後編に分けさせてもらいました。中途半端になってしまっすいませんでした」

一護「リリカル図鑑ゴールデンは後編でやるみたいだから今回は休みだ、質問をくれた読者の皆、すまねえな」

桜「今回も質問と感想を受付けているからどんどん送って下さい。では皆さんまだ次の話で会いましょう」

一護「じゃあな」

第六幕 ジュエルシード搜索 後編（前書き）

桜「漆黒と魔法少女リリカルなのは 第六幕が始まるよー」

一護「今回は更新が早いな」

桜「はい、今回は時間が空いたので早く更新できたんです」

一護「このペースで続けられるといいな」

桜「できるかぎりそうしたいです」

第六幕 ジュエルシード搜索 後編

お互いの自己紹介が終わり、恋次達は庭で紅茶を飲みながら会話をしていた。フェレットのユーノは月村邸の子猫に追い掛けられていた。というより襲われていた。キューキュー鳴きながら子猫から逃げるユーノを恋次とルキアはそんな光景を苦笑いをしながら見ていた。

それにしても、と恋次は思う。

（周りが女ばっかで落ち着かねーぜ）

恋次の周りには、ルキア、なのは、アリサ、すずか、と女の子ばかりいる。一応なのはの兄の恭也も来ているが、すずかの姉の月村忍さんの部屋に行ってしまったので、この場にいる男は恋次一人だけである。あ、忘れてた、あとユーノも居たな

（でも今のコイツはフェレットだなあ……しかも猫に襲われてるからな…）

そう思い恋次は子猫に襲われているユーノを見た。全速力で子猫の追跡を振り切り、なのはの肩に避難する。

（フレットだけはないたくねえぜ…）

恋次はユーノに同情の目線を送る。

その時、なのはは一瞬驚いたような顔をした。

（ユーノ君！）

なのはは念話でユーノに話し掛ける

（うん。近くにジュエルシートがあるね）

ユーノは、なのはの肩から降りて森の中に走っていた。アリサ達を巻き込まない為の配慮だろう。

「ごめんねアリサちゃん、すずかちゃん。ユーノ君がどこかに行っちゃったみたいだから探してくるね」

そう言って、なのはは席を立つ。

「ユーノが？ 私たちも探すわよ？」

「ううん、大丈夫。すぐに見つかると思うから」

手を振りながらなのは言う。

なのは達の様子で恋次達は気付いた。もしかしたら二人はジュエルシードの反応を捉えたのでは？

「じゃあ俺達も一緒に探すぜ」

「なのは殿がこんな広い森の中に入ったら迷ってしまう可能性は無くもない。私と恋次も付き合うぞ」

恋次とルキアが席を立つ。

・ ・ ・ ・ ・

なのは、ユーノ、恋次、ルキアの三人と一匹は森の中でジュエルシードを探していた。なのははバリアジャケットを着て、手にはデバイスの『レイジングハート』を持ってる。

「なのは！本当にこちら辺にあるのか」

「そのハズなんだけど……」

すると大きな足音のような音が聞こえた。

「な……何だこの音は！？」

恋次達は辺りを見回す。

「お、おい、恋次、なのは殿、あ、アレは何だ？」

動揺するルキアの指差した方を見ると

「「「！！」」」

「にゃーー」

皆の目の前には大きな大きな猫がいた。

「デカッ！」

恋次は目の前にいるデカイ猫に思わずツツコミを入れた。

「えっと……これは…」

「多分あの子の『大きくなりたい』って願いが叶えられた……んだと思う」

大きな猫を見ながら、なのはとユーノは苦笑いをした。

「いや、あれはデカ過ぎるだろ！！どんだけテキトーな願いの叶え方をしてんだよ！！」

変な願いの叶え方をしたジュエルシードに対して声を荒げながらツツコミを入れる。

「しかし本当にデカイ猫だな…ひょっとしたら虚よりもデカイかもしれない」

ルキアは大きな猫を見ながらそんな事を言った。

「でも、あのままじゃ危険だから早く封印しないと」

ユーノは『広域結界』という辺りの空間と時間軸をずらす魔法を使った。

「そ…そうだね。流石にあのままだ、すずかちゃん困っちゃうだろうし…」

そう言ってなのはレイジングハートを構る。

すると、その直後に背後から金色の光が通過して猫に直撃した。

「にゃー！ー！」

猫は悲鳴を上げてよろけた。

「だ、誰!？」

その場にいる全員が光が発射された方へ振り返った。

そこには金髪のツインテールで黒い服を着た少女、フェイトが空中でたたずんでいた。

第六幕 ジュエルシード搜索 後編（後書き）

コン「リリカル図鑑ゴールデン!!」

桜「さあ、今回もやってまいりました。リリカル図鑑ゴールデンのお時間です」

一護「じゃあ、今回、最初の質問から行くぞ：まずは赤夜叉さんの質問だ『ソウル・ソ・サイティの連中は出ませんか?』の答えはまだ決まっていきたいだ。

作者は一応、3，4人くらい出すつもりでいるみたいけどな」

桜「今回のリリカル図鑑はこれで終わりです」

一護「早ッ、まだ一つしか読んでねえぞ!」

桜「今回は一つしか質問が来てないんですよ。だから今回はこれで終わりです」

一護「いいのかそれで! 本当によいかそれで」

桜「うるさいですよ…一護…少し黙りなさい」

一護「テメエ……」

桜「では今回も質問感想を待ってますのでどんどん送って下さい。
待ってまーす」

第七幕 対決（前書き）

桜「漆黒と魔法少女 死神代行と魔法少女が始まるよー」

第七幕 対決

（私と同じ魔導師…）

白いバリアジャケットを着た女の子を見ながらフェイトは思った。

（でも……母さんのためにも……ジュエルシードは譲れない）

フェイトはなのは達の方へ飛んでいった。

・ ・ ・ ・ ・

「あれは……まさか僕と同じ世界から来た魔導師!？」

フェイトを見てユーノが驚く。

「ってことは狙いはジュエルシードか!？」

恋次は背中に背負っている袋から斬魄刀を取り出し、フェイトに向かって構える。

フェイトは木の上に着地した。

なのた達も木の上に立っているフェイトを見つめる。

フェイトの持つバルディッシュが鎌のような形になる。

「申し訳ないけど、頂いていきます」

フェイトはバルディッシュを構えて、なのには襲い掛かる。

「なのは！」

ユーノが叫ぶ。

バルディッシュの刃がなののはに迫る。

だがバルディッシュ刃はなののはに届くことはなかった。なののはに当たる直前に刃は一つの刀によって止められていた。

「!!」

攻撃を止められた事にフェイトは驚く。

「恋次！」

白い魔導師の子の隣にいる少女は、私の攻撃を止めた額にタオルを巻いた男性の名前を呼ぶ。

「ルキア、なのはを連れて下がってろ」

「えっ!？」

目の前にいる男性の言葉にフェイトは耳を疑った。

(ルキア……? 今この人、あの子をルキアって呼んだ?)

フェイトは動揺しながら自分の攻撃を止めた恋次を見た。

「俺の仲間に手を出し事を後悔させてやるぜ!!」

恋次はそう叫びながらバルディシュを弾いた。

「く……！」

フェイトは思わず後方へ飛んだ。

恋次は斬魄刀に手を沿え、自分の斬魄刀の名前を叫んだ。

「咆えろ『蛇尾丸』！」

蛇尾丸と呼ばれた途端、手に持っていた普通の斬魄刀の形が刀身にいくつもの節を持った大きな刀に変わった。

「おらああああ！！」

恋次はフェイトを追って蛇尾丸を伸ばしながら横薙ぎに切る。

フェイトは上に飛んで蛇尾丸の斬撃を間一髪交わす。蛇尾丸は後ろの木に当たった。木はミシミシと軋み、五、六本の大木が大きな音を立てながら倒れた。

「なっ!?!」

フェイトは倒れた木を見て驚いた。

（なんて威力なの!?! あんな攻撃を一撃でも受けたら終わる…!!!）

恋次の蛇尾丸の威力を見てフェイトは冷汗を流した。

「す………凄い」

近くで様子を見ているユーノも蛇尾丸の威力に驚いていた。

「死神っていうのは皆、恋次さんみたいに強いんですか？」

「はい、私達死神の斬魄刀は普通の刀と違って名前があるのです。その名前を呼ぶ事で私達死神は自分自身の能力を格段に上げる事ができます」

「し、死神っていうのは恐ろしい人達ばかりなの…」

恋次の言葉になのはは若干引いた様な声を上げた。

フェイトは空中に浮いたまま恋次達を見下ろす。

（接近戦は厳しい…だからと言って遠距離戦になったらあの刀の餌食になる…一体どうすれば）

恋次達を見つめながら状況を分析していると。

「フェイトー！」

他のジュエルシードの捜索をしていたアルフがやってきた。

今の彼女の姿は人間の姿ではなく狼の姿になっている。

「アルフ！」

「大丈夫かいフェイト！？」

「うん」

二人は地上にいる神楽達を見る。

「他の魔導師かい？」

「うん。それに……」

フェイトは少し躊躇してから言った。

「二護の仲間も一緒にいる」

「二護の！？本当かい！？」

「うん」

フェイトは頷く。

「よし！あたしが連中の相手をするから、その隙にフェイトはジュエルシールドを回収して！」

「でもアルフ……」

「大丈夫。あたしはフェイトの使い魔だよ？心配いらないよ」

アルフはフェイトを安心させるように言った。

「それに一護も仲間は傷つけないように足止めするよ」

「……うん。お願いね」

アルフの言葉を聞いてフェイトは微笑んで巨大猫の方へ向かった。

「マズイ！ジュエルシードを封印するつもりだ！止めないと！！」

ユーノが叫んだ。

「そうはさせないよ！！」

空からアルフが迫る。

「ユーノ君！」

なのはが走る。

「大丈夫だよ、なのは！」

ユーノは防御の障壁を張ってアルフの攻撃を防いだ。

「ちっ！」

アルフは一旦、ユーノから離れる。

「なのはジュエルジードを！」

「う……うん！」

ユーノに言われて、なのはが走り出す。

「させないって言っただろ！」

アルフは背後からなのはに襲い掛かる。

「なのは!!」

ユーノが叫んで、なのはは目を閉じる。

その時。

「はぁぁぁぁ!!」

ルキアは叫びながら、なのはとアルフの間に瞬歩で入って斬魄刀で攻撃を防いだ。

「ルキアさん!!」

なのはが叫んだ。

「ルキア!?!」

(フェイトの言ったとおりにこいつらは一護の仲間!?)

アルフがそう考えた時。

「よそ見してる場合かよ！」

恋次が横から蛇尾丸を振ってきた。

「くっ！」

アルフは障壁を作って攻撃を防ぐ。だか恋次の蛇尾丸の威力に押されてアルフは障壁ごと吹き飛ばされた。

「うわぁあー！」

木にぶつかってアルフは悲鳴を上げた。

「なのは殿！大丈夫ですか！？」

ルキアは後ろにいる、なのはに振り返った。

「は…はい！ありがとうございます！」

なのははルキアにお礼を言った。

「ルキア！たまにお前も役に立つじゃねえか」

「たまには、は余計だぞ、恋次！！」

恋次に文句を言った後、ルキアはアルフを見た。

立ち上がったアルフもルキア達を見る。

（あの恋次ってやつ、なんて威力の攻撃をしてくるんだい！？これじゃ手加減してたらこっちがやられちゃうよ！）

恋次の強さにアルフは戸惑う。

（けど一護の仲間を傷つけるわけには……！！）

アルフが迷った時。

「アルフ！」

フェイトが戻ってきた。

「フェイト！」

「ジュエルシードは回収したよ。引き上げよう」

そう言ってフェイトはアルフを連れて去って行った。

「しまった！ジュエルシードが！！」

ユーノが慌てて走り出す。

なのは達もユーノの後を追う。

巨大猫がいた場所に着いた。そこにはさっきまで大きかった猫が元のサイズに戻って倒れていた。

「やられた……」

第七幕 対決（後書き）

桜「今回もリリカル図鑑ゴールデンはお休みです」

一護「おいおい、またかよ」

桜「仕方ありませんよ。質問が一通も来ないんですから。話は変わりますけど、イイ日旅立ちさん、感想ありがとうございます。また次の漆黒と魔法少女リリカルなのは 死神代行と魔法少女 第八幕で会いましょう」

一護「じゃあな」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7852o/>

漆黒と魔法少女リリカルなのは 死神代行と魔法少女

2011年10月8日03時08分発行